



マーシャル方面遺族会
 (旧クエゼリン方面戦没者遺族会)
 郵便番号 154
 世田谷区野沢 3-11-3
 電話 東京 (421) 3614
 振替口座東京 93487 番
 編集兼発行人 浮田信家

篤志会員 木ノ下 甫

この度篤志会員として、お仲間入りさせて頂いた機会に、一言ご挨拶させていただきます。本会がはじめクエゼリン島の遺族を中心として発足されてから、逐年内容を充実され、広くマーシャル、ギルバート全域の遺族会と発展され、政府すら不可能とした同方面の収骨、現地慰霊祭、現地に慰霊碑の建立等を断行されたことは、誠に敬服の外ありません。機関誌「環礁」も常に立派な内容で、会員皆様の、心の結びつきに役立って居り、こんな立派な遺族会は、他に見られぬところと心から感銘して居ります。

私も戦前からクエゼリンの第六根拠地隊参謀として、マーシャル方面の防備作戦に従事し、十七年十月に、北方の第五艦隊に転任した者ですが、マーシャル、ギルバートの島々は、全部巡っておりましてだけに想い出深いものがあります。今回その頃の日記を追って追憶を書き記し、環礁に載せて頂きますが、当時の実情を御推察頂くようですがにもなれば何よりと存じます。

アジア解放のために起った大東亜戦争の真実と、英霊の比ひない御功績を忘れては、日本の独立も栄光もあり得ないと思ひます。

当福井県護国神社に、英霊顕彰の記念館「秀芳館」ができて、私は毎日奉仕して、遺品や記念品の収集展示に当って居りますが、その中にクエゼリン本島の浜紫檀製の小卓と杖があります。これらにながる思いでも、いづれ書きたいと思ひます。今後の御発展を祈り、皆さんの御厚誼をよろしくお願い申し上げます。

石橋梅子夫人の面影 (前列中央)
 慰霊碑除幕の日



梅が香の とどかぬ環礁に ちりゆきし
 みたまたづねて 旅立ち給ひし

浮田 櫻代

目次

- 巻頭のことば……………木ノ下甫 (1)
- マーシャル戦記その一木ノ下甫 (2)
- 靖国神社にたまたま祭…………… (4)
- 石橋湛山顧問御夫人の訃報…………… (4)
- 妻子にあてた最後の便り…………… (4)
- マキン島における一日本兵手記 (5)
- 「タラワ恐るべき戦斗の記録」を讀んで…………… (8)
- 政府派遣のギルバート諸島遺骨収集団からの消息…………… (9)
- 麗わしいナウル四高会…………… (11)
- 軍事機密の壁に泣く…………… (11)
- 南太平洋のクエゼリン環礁遺骨収集団の派遣不許可…………… (11)
- 仲間に加えて下さい (1)
- 浦手ハル (11)
- マーシャル諸島の戦没者遺骨収集のため政府派遣団派遣を聞いて……………佐竹エス (12)
- ウートルック島の慰霊遺骨収集に想う……………佐竹エス (12)
- 篤志会員徳原夫妻のことども…………… (13)
- 昭和四十七年二月六日
- 慰霊祭
- 總會のご案内…………… (14)
- 直会旅行会
- 寄附者芳名…………… (15)
- ナウル共和国領事館開設…………… (15)
- 仲間に加えて下さい (2)
- 沢田キミ子 (15)
- 鈴木やすこ (15)
- 事務局だより…………… (16)

マーシャル戦記

—その一—

木ノ下 甫

この手記は、当時の日記を主として、説明上必要な事項は、公刊戦史から補筆しました。

◎ 序章

Ⅱ 開戦前の内南洋

昭和十六年の新春、第四艦隊第十八戦隊の巡洋艦天竜の砲術長であった私は、二月十日内南洋警備のため、旗艦鹿島、僚艦竜田と共にサイパン港に入泊した。

当時の内南洋は、長い間「委任統治領」で、軍備を禁ぜられていたので、前々年昭和十四年来防備の強化に努めていたが、それは飛行場の設定と、これに伴う極く少数の高角砲を配備する程度に過ぎなかった。

当時の日話によれば、サイパン島の防備施設は次のようなものであり、マーシャル方面も大同小異であった。

日記

「2月14日 サイパン島防備施設視察 午前八時半橋発、二台の自動車で、まづ北行。水上基地に行く。水偵数機。大艇一機。兵舎一棟。格納庫一棟のみにして目下拡張中。更に北上して高地に登る。南海の外光明媚。西にリーフ白く浪打ち、風は紫紺の海、内は緑の浅瀬、水涯遙かにかすむ。山頂に八種砲三門。貧弱なり。マツビより北トロー岬に行く。奇岩、絶壁の山、上陸地点なし。

（後に邦人婦女自決の断崖）。引返してラウラウ湾に向い、東へ峠を越す。東岸にはたこやし多し。上陸可能。引返してチャランカノア南洋興発クラブにて昼食。二時半南行してアギーガン岬砲台を見る。断崖の上。十五種砲二門。東海岸上陸適。飛行場概成。偵察終つてガラパンに帰る。」

戦隊は2月16日 サイパン発、バラオに至り語訓練、ついでウルシー、メレオンに入港して、3月18日トラック島に入港した。ここは内南洋随一の良港。大艦隊の泊地として適当であり、開戦時第四艦隊の本拠であった。

日記

「3月19日 午後上陸。広場は無惨にもブラック林立し、海岸のマングロップ林も追々埋立てられて戦時色濃厚。支庁前の山より見下せば、港内に艦船数十隻軍港の如き感あり。山道を東してトラック神社に参拝。山下の道には慰安所軒を並べ、それ以外見るべき店なし。熱帯ながら正にお寒い事共なり」

ここで甲種戦技実施。その後ロタ島、サイパン島を経て4月14日横須賀に帰復。更に更に回航して整備の上、横須賀に帰港し、同月25日に出港するや、一路マーシャル方面に向つた。6月1日マーシャル諸島中最北西のブラウン環礁に着。仮泊して6日にはロンゴラツ

ブ環礁入泊。ここには望楼と象観測所があるだけ。島内には豚、犬、猫、鶏などが、嚙々として仲良く遊んでいて、平和な別天地であった。7日同環礁発。8日ウオツゼ環礁入泊。

日記

「十二時上陸して視察。水上機基地の迂りより上陸。工事中にて、軍夫の宿舎軒を連ね、真裸の軍夫達。物凄く異様の臭気。すさまじ。陸上機基地も半ば工事中。アスファルト熔けて流るる仕末。仲々事なり。第六防備隊本部にて少憩。農園に野菜、唐黍あり。唐黍は有望。野菜も日蔭は育つ如し。酷暑。」

9日ウオツゼ環礁発。午後マロエラツブ環礁入泊。

日記

「ここも水陸の基地建設中。島中が飛行場。土人以下とも見ゆる軍夫達。彼等も御苦労なり。昨日ウオツゼ環礁に見し囚人墓地を思う。碇奇襲隊、南海挺身隊、東襲撃隊とかの献木。赤誠隊司令官、典獄誰々との碑文もあり。工事に当る囚人達も南海の防備に散つて、死所を得たと云うべきか。礼拝して帰りし。今日も多数の軍夫を見る。偉大なる礎石なり」

10日マロエラツブ環礁発。メジエロ環礁に入り、ついで11日ヤルト環礁に入泊。13日イミエジ島沖仮泊。ここには大艇基地と通信隊ができていた。しかし工事は5月竣工の予定が難行し、年末迄かかるとのことで、建築部の怠慢を憤慨している。その原因として、糧食、燃料、清水の補給がうまく行かず、戦時の混乱察すべきだと

記している。14日出港。クエゼリン環礁へ向う。途中戦闘発射。15日クエゼリン入泊。

日記

「10時迄当直。独ソ緊張。汪兆銘訪日。ああ日本にも一人位彼の如き熱の人ほしきものなり。軍人中一蔭に及ぶものなきは、日本の一大不幸に非ずして何ぞや。夜更閑寝もやらず。外に雨声を聞く。困を思い、寝られざる夜はスコールの」

はげしき音を、幾度か聞く。6月22日 出港して戦闘射撃訓練中、独ソ開戦のニュースを聞く。6月29日 クエゼリン発。ルオット入泊。陸上機基地と砲台、通信所あり。中攻三十機迄収容可能」

6月30日 ルオット発。トラック島に向う。途中クサイ島沖を通り、ポナペ島に7月3日着。

日記

「正午頃ポナペ島を左舷に見る。鹿島のみ入港。岩山奇なり。緑濃き山頂は、雨雲にかくれ湾内に汽船数隻。ハワイのダイヤモンド、ヘッドを憶い出す。陸上機基地は丘の上のみにあり。水上機基地は島の東端。いづれも工事中にて飛行機なし。燃料爆弾庫を山の中に作れば価値大なり」

途中オロルックに寄つて、7月6日トラック入港。この日第四艦隊は内地に帰航せず、当分内南洋にて訓練のことに発令される。7月21日 八月上旬迄に戦備を完成せよとの電令、聯合艦隊司令

部からあったが、実施は程遠い状況であった。9月1日 トラック発、サイパンに向う。3日入港。ここで艦長交代し、10日発トラックへ向う途中、大異動発表され、第六根拠地隊（マーシャル諸島）参謀との番号を受ける。

日記

「9月19日 朝六時。天竜に別れを告げて六時半、日航のランチで大艇へ。七時半発。試運転終つて轟然水を蹴つて早くもぐんぐん東へ高度をとる。天竜、鹿島も小さく見え、環礁あざやかに、波は縮緬のよう。高度二千、窓外を白雲千切れ飛ぶ。途中モートロック島を見下し、一路ポナペへ。十時半ポナペへ着水。水上基地の前、ランチで水路を廻りくねって棧橋へ。右手に奇岩の岬。ポナペは丘の麓の小さざりした町。同行の士官三名、皆福井県出身で柳沢八郎海軍大尉（昭和二十年四月桜花特攻隊で戦死）に佐々木海軍少尉、期せずして福井県人会。午後一寸町を歩く。教会堂が兵舎。

20日 六時宿を出て、ランチで大艇へ。七時発。高度三千。少々寒い。同乗四名。一路東行。午後一時半ヤルト着水。一泊。

21日 朝三時半。屋外に号令を聞く。青年団の銃剣道練習を見る。練武館では剣道、いづれも下手ながら仲々意気壯。七時離水。一路北へ飛ぶ。下の環礁雲間に見えるがくれ仲々尽きず。漸く海洋に出る。まもなく下にアイリング、



(中央) 八代司令官 (左) 機隊隊長 (右) 木ノ下参謀

ラブラブ環礁が見える。更にナモ環礁。十時頃クエゼリン本島の北側に着水。小さな艇で冷々しながら、飯棧橋に向う。乗務員が飛行機より怖いという。棧橋から車で、ごたごたしたバラック宿舎を、道の両側に見て、庁舎に着く。前任の戦務参謀清水少佐から申継ぎを聞く。椰子林中の宿舎にやすむ。

当時の第六根拠地隊は、クエゼリン本島に司令部があり、司令官八代祐吉少将、首席参謀法元廉中佐、外に機関参謀、隊機関長、軍医長、主計長各一名。クエゼリンには第六防備隊があり、東のエビジエ島には第十九航空隊(水偵隊)があった。離島の防備部隊としては、ヤルトに第五十一警備隊、タロアに第五十二警備隊、ウオッゼに第五十三警備隊があり、第四艦隊所属の第二十四航空戦隊はルオットに司令部があった。

航空兵力こそ攻撃の主力と頼むところであった。外に艦船としては、正規の軍艦は敷設艦常磐が配属された外、商船に砲一門搭載の特設砲艦八海山丸、光島丸、豊津丸、第八砲艦隊の生田丸、長田丸、大同丸、朝海丸があり、それに特設掃海艇四隻の第十六掃海隊と、特設駆潜艇三隻からなる、駆潜隊四隊があった。

司令官は後藤英次海軍少将で、兵力は千歳航空隊の中攻三十六機がルオットに、横浜航空隊の大艇は、ヤルト環礁のイミエジ島に二十四機が進出していた。マーン諸島は、航空基地があること、不沈空母の役割を持ち、この

冷徹の提督井上成美中将が、「苦勞だがしっかりたのむ」と云って落涙されたのは、意外の感に打たれた。けだし長官の胸中には、対米第一線の守りだけに、生還を期しがたいものと予感されたのであるか。正に八代司令官にあってこれは生別が死別となったのであった。

10月19日 東条内閣成立。内外の情勢いよいよ緊迫。山雨到らんとして風楼に満つるの感。対米第一線の緊張ひしひしと迫る。10月27日 飛行艇で司令官共々トラックへ飛ぶ。艦隊の作戦打合せ。最少限度の兵力で臨む作戦だけに悲壮なものであった。しかし作戦会議も終って記念撮影の後乾盃し一同意気旺んなものがあつたが、30日 司令官と共に、長官にお別れの挨拶をしたところ、平素

五二警は舞鶴で編成され、同郷の人達も多い。進駐早々で、まだ兵舎が完成しないので、航空基地用兵舎に仮住居している。陸上基地施設は概成していたが、A、B砲台共完成したばかりで、まだ試射も終わっていない。万事これからである。

10月31日 私達はトラックを後にしてクエゼリンに帰った。以来戦備の促進に各離島を飛び廻ることになった。内地で編成されていた各警備隊は、夫々編成完了と共に、マーン諸島方面へ進出して来た。第五十一警備隊(司令、千々波大佐)は11月2日 ヤルトに進出完了。第五十二警備隊(司令、阪本大佐)は11月5日タロア島に進駐。第五十三警備隊(司令、寺田大佐)は11月1日ウオッゼに進出完了した。

11月21日 第十六掃海隊、光島丸入港、昼食に三潜戦司令以上を招待。万死を期して虎穴に入らんとし、尚明朗快活。真に武人の華なるかな。羨まし。

11月5日 進駐早々の各隊巡視と戦備促進のため、司令官に随行、大艇でウオッゼに飛ぶ。寺田司令以下第三種軍装(カーキ色)に身を固め、颯爽と士気旺盛。巡視終って島内一巡。滑走路は十文字に略完成。内海に面して水上機基地の江りがあり、島の北端にはコンクリート製の弾薬庫、十二種七聯装高角砲三基宛のA、B砲台も完成して新鋭兵器らしい威容も頼母しい。十三耗機銃装備のトーチカも島の要所に作られているが、何れも珊瑚礁の事として、地下に作る事ができず、地表上に二米程も高く露出しているのは欠点であるが致しかたがなかった。

11月6日 タロア島に飛ぶ。

11月12日 掃電中の長官から、電令作第一号の飛電あり。いよいよ開戦の決意は固まったことを知る。勿論和平交渉は栗栖大使を派遣して最後まで努力するが、米国の強硬な態度は到底妥協の路を見出せそうもなかった。

25日 午前豊島丸、八海山丸、光島丸、巡視、商船だっただけに居住施設は良好。午後諸会報。作戦命令の伝達。夜に入って漸く終る。摩下への命令を書くため遂に徹夜。

靖国神社みたま祭

創立以来毎年七月靖国神社社頭も奉納し英霊を慰めました。みたま奉納する本会の大型献灯、今年も祭の一部始終を靖国の八月号から

石橋顧問御夫人の訃報

「石橋ムメさん(元首相石橋湛山氏夫人)九日午前九時、肝臓ガンのため東京都中央区の聖路加病院で死去、八十二歳。自宅は東京都新宿区中落合四ノ六ノ一五。告別式は十五日午前十一時から東京都荒川区東日暮里善性寺で。喪主は長男湛一氏」

八月十日の各新聞の朝刊が一樣にこの記事をのせた。私は頼る杖をもぎとられたように落胆しました。つい一月前七月のはじめに環礁14号を、お届けしたときはいつものように慈愛にみちたご様子で嬉しげに受取られ、会の様子などお尋ね下さいました。その後のご様子、特に御入院のことは、全く存じませんでした。夫人は、本会発足以来殊の外本会に気を配って下さいました。国家の手で収骨慰霊を行っていただきたい歎願には、特に努力して下さいました。母の代表として御拝下された慰霊碑の会名は永久に英霊と共に残りましょう。毎年二月六日の慰霊祭は申すに及ばず、現地派遣員の壮行会、役員会、未賓招待のパーティーなどよく御参加下さって、御指導して下さい、四十二年八月の慰霊碑の除幕式には、特に終始御満足げに會員の皆様にご参加下さったときは今だに目の前にちらつきません。

會員の方でお困りの方の事を考えるようにといふことは屢々お申付けありました。役員会でもその都度検討しましたが組織と予算の関係もあって、躊躇しておりました。今日と知り申さない次第でした。御次男、御戦死の悲しみは環礁3号の「和彦の思い出」でお察しするに余りありません。遺族会の運営も軌道にのり、現地の碑も完成し、安心なさって御次男のもとに急がれたのでしようか。八月十五日善性寺にお訣れにまいりました。「マーシャル方面遺族会」と墨痕鮮かにしるされた生花は、夫人のすぐ近く香煙静かにゆらく中に美しく供えられてありました。御生前の御指導に厚い御礼を申し上げ、先にゆかれた御令息と安らかなお眠りにつかれますよう御祈りました。(浮田)

ら頂戴しご紹介致します。よろ。

「みたま祭終る」

好天で賑わう」

七月十三日から十六日まで執り行われた恒例のみたま祭も天候に恵まれ連日参詣者で賑わった。

ほんぼりを懸けつらね、数千の献灯をともし英霊をお慰めするみたま祭も、年を重ねて、今年は二十五回目、すっかり東京の夏の祭として、浴衣姿の家族連、老いも若さも、そして外国人と国際色豊かなものとなった。

祭典は午後六時御本殿において筑波宮司斎主のもとに執り行われ航空自衛隊、陸上自衛隊、警視庁、消防庁の各音楽隊が奏楽を奉仕した。

境内能楽堂では正午から古武道詩吟、民謡、舞踊、奇術、浪曲、琵琶、能、狂言、日本舞踊、バレエ、歌謡曲等数々の芸能が奉納され、午後八時半より映画「靖国百年祭」が上映され好評のうちに百年祭の感激を新にした。

十三日には午後八時半より秋田竿灯が神門内で奉納され、都内近県よりこの竿灯を見るため駆けつけた人で埋まり、風に煽られ、崩れかかる竿灯を、手に汗を握り歓声をあげていた。

全国有名灯籠展には、今年新たに福岡県八女地方に伝えられている八女提灯(回転灯)が奉納され連夜参拝で賑わった。外苑大村銅像中心に千代田区民踊連盟の主催により、四日間共盆踊大会が開催され、十六日午後より、東京都相模連盟により、奉納相撲大会が開催された。

妻子にあてた最後の便り

暫く御無沙汰致して居るが、皆変わった事もなく達者で居られるか。今後共丈夫で居てくれる様祈る。御身上は何から何まで一切取もってやってくれ様頼む。多忙のためどちらへも御無沙汰して居るが、田舎の兄の方へも宜敷伝言してくれ様、何程のことなからうが、兄と相談の上何事もやれ。

多嬉子御前様も、体を丈夫にする様心がけ何時も明朗に、母上に従い孝養してくれ。母は絶対の物と知れ。少しの不満がましき行いなすべからず。堅く禁ず。女らしくあれ。

次に貯金通帳の番号を知らせる軍事郵便貯金通帳鑑いか二五二八号で六百三十五円ある。中野区鷺の宮一丁目四十四番地早野園香子様より、慰問袋を戴いた。礼状は出してあるが、届かないだろうと思う。其の時の人形は何時も胸に付けて居る。私は非常に嬉しかった。その事を御身から御礼の手紙を差上げてくれ。

此の際何事も書きたいと思うが何も書けない。永い間有難う。是れで御免。さようなら。さようなら。

(3頁よりつづく)

29日 ウェーキ島の米守備隊兵力一一九名ありて、二ヶ中隊を以てしては攻略困難、兵力増加の電令あり、運送船一隻、軽巡一隻グワム島に向う。いづれも米海軍の開戦の準備なり。吾早きか、彼早きか。

30日 六防対空射撃(八種四門)順調に終つて九時 第三寿丸でルオットに向う。久々の航海。風涼し。夕刻ルオット島に到着。

12月1日 午前ルオット砲台射撃。順調に終つて、六時から陸上基地視察。中攻三十七機、戦闘機三十四機、勇姿堂々場内を圧す。視察終つて司令官一行帰途につき、一人残つて六防宿舎に一泊。月清く風涼し。

2日 ニムル島視察。ここには分遣隊兵舎がある。3日、第六水雷戦隊入港。午前旗艦夕張にゆき、午後、ウェーキ島攻略作戦打合せ。六根から陸戦隊一ヶ中隊を出すこととなる。終つて水艇でクエゼリンへ

5日 雨 昨日八時頃、ハワイの海軍司令官作戦緊急信を全艦艇に発せりと。今日は米潜四隻、オオ西方海面を東航中と。彼も仲々油断なきが如し。シカゴトリビューン紙米の作戦計画を曝露す。(一千万動員計画)

6日 日米会議最後の場面となる。7日 この一日なり。終日心迫りたる気持。日枝丸入港。25耗機銃、37耗機銃を持ち来る。(弾薬なし)。司令官、全陸上兵力視閲。軍方部隊千名も武装し士気熾矣。夜半緊急信相ついで至る。

- 菅谷 千代様
- 菅谷多嬉子様
- 昭和十九年九月二十四日マロエラブ島にて戦死四十五才
- 東京都港区出身
- 菅谷 寛一

マキン島における一日本兵の手記

昭和18・11・19から12・13まで

十一月十九日

本日も相変わらずで、大型機来襲す。16日夕方からの来襲に大部馴れ、一同落付いて動作せるも、地上砲火、小戦闘機のなきに一同口惜しがる。夕方二式大艇の報告にては明朝あたり、敵の上陸の模様なり。夜は第二配備。観測機三機中二機帰らず(指揮官機外一)一同決心固し。

十一月二十日

午前三時十五分頃東方に飛行機三十二機見ゆ。第一配備中なり。これが最初の艦上機来襲にて夕方午後二時半頃まで十六機又八機又大型機の空襲にて、全然陸上設備は陰形なし。

第一次来襲にて、高角砲は射ちまくる。十三番高角砲使用不能となる。第一次に敵は高角砲台を撃破の目的の如し。雨あられどころの敵弾ではない。地上すさまじいほど射られた。四機ずつ太陽の方向より突き込んでくる。

午前五時頃、高角砲の附近のガソリンに火災。やむなく高角砲員は去る。入りかわり、立ちかわりの来襲にて残る兵器は、各自持参の兵器と外海岸十三種一門なり。夜間一同は各配備にて第一配備の如し。十九空副長以下〇〇名は夜間に入り、ウキヤガンに退く。敵機撃墜八乃至九機とか。

十一月二十一日

昨朝から無食にて空腹を感ず。

午前四時頃より外海岸に敵艦見ゆ。戦艦2、巡洋艦4、舟艇3、艦砲射撃をはじめ。艦爆は昨日の如く、朝から投擲、機銃掃射を行なう。東西陣地内本日の射撃爆弾にて全く新天地と化す。椰子は倒れて穴があき、これがマキンの島とは思われぬ程とはなりぬ。平射砲は身を粉にして発射せり。艦砲射撃たるや四〇種、二〇種程度の六門の幾百、一斉打方かと思われぬ。約六―八時間に亘つて陣地の連絡は絶えぬ。午前十一時頃と思わる。敵は戦車にて、内海より上陸し本部に近よる。西陣地又本部附近にありし者にて、格闘するも、余りにも荒れ果てた地にて、小銃と戦車、敵後連部隊数知れず。内海に輸送船入港。舟艇三十数隻にて上陸。一同は身を以て戦車と戦い、遂に夕方、指揮官以下〇〇名は玉砕す。後本陣地方面の我軍は玉砕を覚悟し、ただ小銃と弾だけにて本陣地に待つも敵来らず、一小隊長指揮にて一度〇〇〇〇に去り兵力をまとめる。そして突撃の予定にて後退するも、敵飛行機に発見され、飛行機にては不利とのことにて、フタリタリまで後退す。事を覚悟してなすことにおそろしきなし。一同元氣なり。夕方友軍がバラバラと帰る。一小隊、阿部隊、清水隊長、工作隊長の四隊長あり。

十一月二十二日

空襲を避けて一日待たず。三日

間の無食を感じ、豚の生肉又コブヲ椰子等にて腹を作る。

十一月二十三日

夕方に入るや愈々待ちに待った夜襲戦なり。各隊毎に揃つて出発。教会のビル、かん詰等として一同大元氣なり。第一決戦隊として工作隊長以下負傷兵数名カヌーにのりてイミエジに向け出港。教会前にて分れる。約三十分前進して敵戦車と遭遇、猛烈な夜襲戦はじまる。内海より外海に敵機銃陣地あり。白砲射らしき煙又戦車砲等猛烈に打つて来る。我々は散開の時機に隊長と分かれ、十六名ばかり別になりたり。道路はたの機銃と遭遇し盛んに交戦す。しかし敵には戦車あり、道路より少し後退せしに殘念、一発わがくちびるをかする。下令にて一同一度去り、明け方に突入の予定にてジャングルまで後退す。明けて二十四日

十一月二十四日

各隊長の行先不明。敵陣地にて戦死する者数〇〇名の阿部隊長は立派に敵機銃陣地に突入して玉砕さる。敵は戦車二〇台、自動車數十台にて朝から掃蕩に入る。勿論我々も戦車に包まれる。最後まで頑張る。体も丸出しにて応戦するも一向にあたらず。戦車砲、機銃等多数打ちしも平気なり。我々は弾丸等平気と思えり。

最後に戦車が来り、いよいよ自決の覚悟なり。しかし幸か不幸か泥沼地のため敵戦車は近づけず、設営隊の者は早まって自決三。本日も斯して生きて過す。最後には吾々も斯うなる故第二の決死隊と

なりて出発すべきか。一同の最後を立派にすべきであると決定。その夜は敵前僅か一五〇米の地にて呑気に休む。

十一月二十五日

十数名中四名外は休み、以外の者は防空壕に四りし所、戦車が大きく廻つて来て、四名はずぐ散開したが、他の者は遂に最後をとげたり。後に残りたる四名全く孤独にて、或はこうして残つたところにて、三日の事、い、そ自決と、銃口をのどにあてること幾度、しかしどうせ死んだ身だ、最後まで頑張れと小銃と剣のみ、それに弾は戦死者の残せしもの一八〇ばかり、この日も一日生きてジャングルに送る。

十一月二十六日

隊長の戦死の地を拜すべく近づき敵の手榴弾一、弾約二〇をもちかえり、陣地を作りて、大いに敵を殺そうとの事で、一日待ったが遂に敵の姿はみえず、まだまだ至るところで砲声聞ゆ。友軍も多数あるものと一同元氣を出す。この日は敵の置いて去つた糧食、パン、角砂糖、コンビーフ、チョコレート等にて、久しぶりに腹いっぱいとなる。少し後日の分まで頂戴してくる。一日進んだが、敵も味方も見えず。夜四〇度(北東方)三千位の地で夜戦あり。我方は潜水艦の如し。

どうせ死んだ身の我々、クーマにも又イミエジにも近づき最後の目的を達すべしと決心す。時に斎藤二曹、後部上水、中田工員と自分の四名あり。斯うなつた上は、出発を急ぐのみとどんどんクーマ

十一月二十七日

に向つて進入す。勿論敵は至る処にて、戦車にて頑張りおりぬ。不思議なもので、神の助けとは思ふが、降りそそぐ敵弾は一向に我々に当たらない。今日はクーマの手前にて寝る。

十一月二十八日

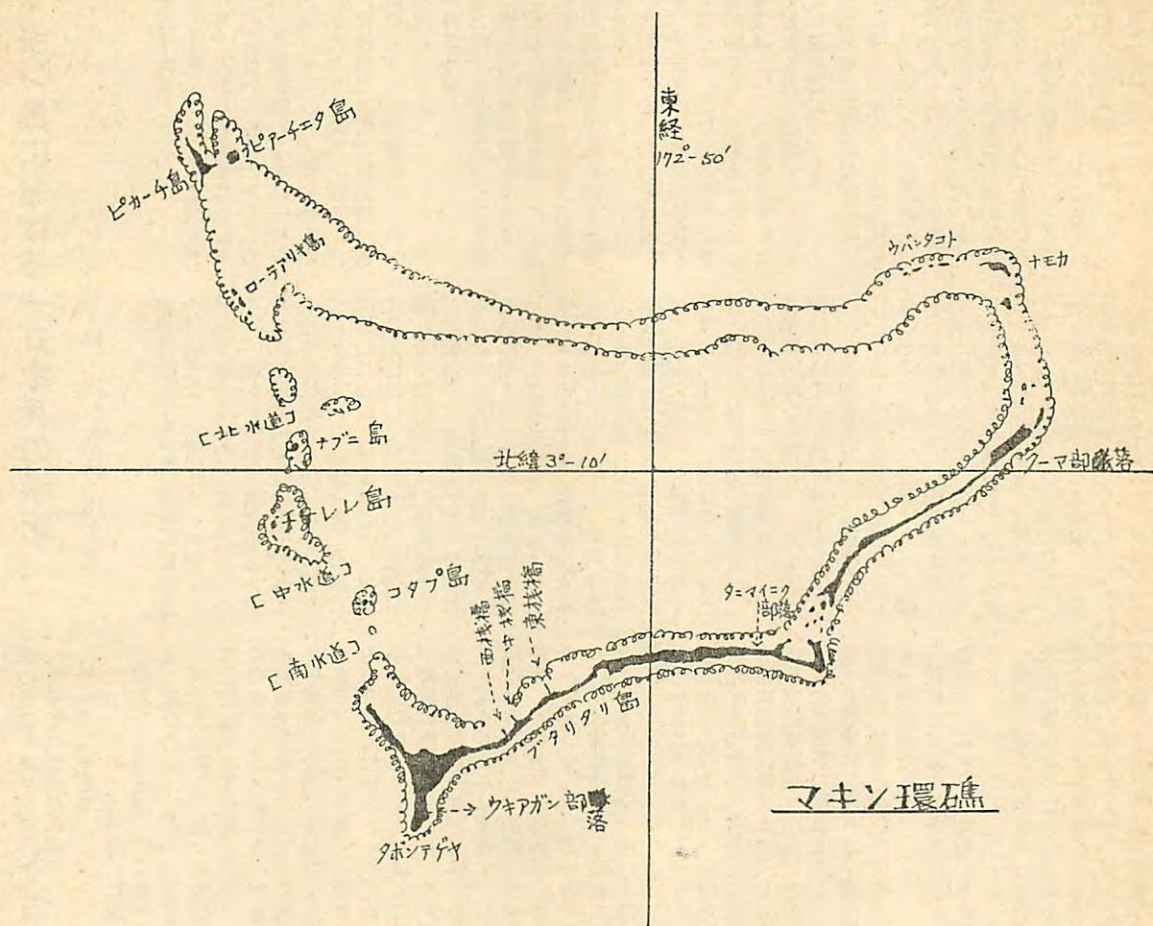
タニマイニクにて過ぐす。潮の引きをみてクーマに渡る覚悟。午後八時頃より三十種位の潮の中をクーマに渡る。スコールあり。少々寒氣を覚える。大部身に垢もたまつた。しかし元氣で散つた友の最後を、一口でも、友軍に伝える迄はと頑張るのだ。敵手榴弾も後には使用するつもりで、持ち歩いているが、不思議でならない。この日は唯神仏の加護にて、カヌーを乗り出すだけが、我々の任務、どこで何事があるかと、決して捕虜にはならない故安心あれ。

十一月二十九日

何処まで生きられることか、すべて神の力だ。クーマの手前の島屯した地にて、夜を明かす。スコールあり寒身に沁む。前方百米に敵の戦車見ゆ。中7台はクーマに向う。二台にて我々の居る島附近を捜索している。戦車は大型のもので、兵隊が各一台に三十人位ずつ乗り、時々下りては附近を捜索するもの如し。吾々四人では戦車二台は強敵と思ふ。息を殺して二、三時間を過し、これ又神の助けか、そのままとなる。かくて一夜を当地に送る。

十一月三十日

朝起きれば、敵戦車が又前方に見ゆ。警戒しつつ、潮の引きを待つ中、昨日の戦車九台掃蕩につく



マキン環礁

ものの如し。我々四名又勇んで、クーマ、クーマへと前進す。最初クーマと思ひしは、クーマの手前の部落なり。そこに午後二時頃入り、島民を何日ぶりに見るに、色々聞けば、今クーマには一人の敵もなし。全部今朝引上げたもの如し。此処にてブタリタリで拾った米を炊く。何と米の飯のうまさよ。島民曰く「昨日クーマ掃蕩にて我軍航空隊一、設営隊一捕虜があつた」とか。吾々はしばしばくやし涙にむせぶ。敵は本陣地○○○と云つてゐる。敵は本陣地から政府棧橋に至る陸上基地の作業にクーマより、二〇名の割當にて出すべしとか。土民(コンパニー)が、アメリカの戦車等について喜んでゐるのは残念だ。夕方コンパニーと別れ、一人クーマの土民が、同行して、いよいよクーマに向う。道中長し。同行のコンパニーより、敵さんのマツチ、煙草、菓子等を貰う。まだ食糧も約十日分位は敵のを、取った分がある。最後まで頑張る予定だ。午前十一時頃クーマ部落につく。夜は静かなり。コンパニーは呑気なり。我等は重大責務を果すまで死んだ覚悟で頑張るのだ。明日中にカヌーにて出発の予定なり。明後日は再び掃蕩の如し。

十二月一日

昨夜は全々死んだ如くに寝た。煙草も吸い飯も食べたためだ。う。先に玉砕された人達に申しわけない。しかし彼等の立派な最期を友軍に知らせて、喜ばせてやるのだ。月も変り、天気もよし。椰子リンゴにてたらふく食つたのち最後の決行を行うべく頑張つてい

る。マキンの戦友よ。我等の決行が成功であるよう陰ながら、祈つてくれ。今日も敵は戦車十九台をもつてクーマにくる。ブタリタリ方面の島民と我軍の残せし物品を、運搬せしもの如し。夕刻に至り部落を出る。島民は成功を祈つて送つて呉れたが、最後の頼みのカヌーは口惜しや、米兵に壊されて、出発不能と見られる。コンパニーに飯をもらう。カヌーも貰ひ明朝の飯も貰つて引上ぐ。今夜も死したる如く眠る。

十二月二日

又もや多数の戦車を連れて、米兵が来たる。コンパニーに対し、盛んに宣伝してゐるものの如し。我々の去りたる方向を掃蕩。防空壕を片っぱしから破壊せり。皆島民が話したためと思われる。夕刻に至り再び決心をとりもどし、カヌーを作りなおして出発すべく○○○に出る。しかし帆は全く使用不可能と認めらる。斯くなる上は一日なりとも長く頑張る、せめて十二月八日の記念日まで長らえて友軍の見えざるときは、敵戦車と最後の戦を交える予定なり。ルータの家にて、夕食を貰う。カヌーもたらふくあり、元氣旺盛なり。米軍は盛んにデマ宣伝の如し。ヤルトはすでに米軍の上陸すみにて、近く日本内地を陥ると。タラワには米軍が幾方上陸したとか、日本軍来れば、合図の手を揚げるように教えしとか。笑わしては困る。道路に敵の手榴弾を埋めたり。戦車を破壊のためなり。後四、五日のこと。落胆する友を励まし、

大いに頑張る。死は何時でも可なり。弾はまだ百発あり。これが最後のたよりだ。手榴弾は斉藤兵曹の一個のみ。

十二月三日

まだ元氣なり。しかし糧食は残り少し。八日までもたせる覚悟。自決の覚悟重厚なり。

今暫らく頑張り隊長以下玉碎者一同の功を友軍に知らせたいものだ。最後の望みとして神助を待つのみ。一日をクーマ部外海岸にて暮す。つくづく思う。軍人最後の死場所こそ大事なりと。

コンパニーの話によれば、米軍中に日本人の二世二人ありとか。又米軍曰く、二十六日夜、リットル・マキン北方海上にて、日本潜水艦により米航空母艦一隻沈められしとか、島民に話せし由。

十月四日

昨夜はクーマ部落の外海岸のコンパニーハウスの中に寝る。明け方クーマ北端の海岸に入る。今日ほとんどなことがあろうと、島民の一人位は殺してでも、カメラをつくり、目的達成に着手する堅い誓い。残るカン詰十九中魚一つを開け、椰子リングにて簡単な朝食をすませ、のち手榴弾一個をもちて便所にゆき、帰ろうとすると銃声数発不意に起り話し声があった。急いで帰って見ると、既に遅し、中田工員は打たれ、斉藤兵曹は夢中で飛び出し、行方不明、あとに残った後部は五発の弾をうちつくなり、次の弾をつめて、自決の寸前なり。待て。死ぬな。まだ弾があると勘まし、先づカン詰一ヶをあけて食い、弾と銃のみとって、海岸に行くことにした。

中田工員ニコリ笑って死せしを見とどけて、我等二人は次の行動につく。海岸リーフを利用して十三人の敵と交戦、約一時間、我等二人は早や死す覚悟にて、上半身を出して打つのに反して、敵はときどき打ち出してくるのみ。待てどもしない。残弾は三十発。

一まずひきあげよう、海岸伝いにシーマに向う。敵ははるか遠くにて打つのみ。後に近よらず。二人は態々シーマに上陸すべく、海岸を走ること約二、三時、途中飛行機、上空を飛ぶも平気なり。遙か弾をうっている様子。遠くに煙幕見ゆ。ヤレヤレ……と戦争後の休みはたのしい。かわいた喉を椰子汁にてうるほし、椰子リングにて腹をつくる。後部は首に弾傷をうけしも大した事なし。

戦争を終わって一ぶくすると、後はさびしい。四人の半ぶんになっても、傷一つ受けず、生きのびる自分こそ、不思議である。先刻の戦闘こそ全弾丸をうって、手榴弾を投げて、最後に自決せんと誓いしに、一向敵さんは近づいて来ず。今日もまた生きのびてしまった。生きのびるといふことは、はたして幸か、不幸か。しかしまた我等には重き使命がある。最後まで頑張るゾと勇気を振り起こす全く敵さんの卑怯なものにつくづく驚く外はない。

しかし、今日からは呑気に寝ることもできない。二人きりだ。食糧も残り十八ヶのカン詰を置いて来たことも、今となっては残念だ。中田君の死が羨しい。実に立派な最後だ。21、22日に玉碎され

た友のもとへ急がれよとその冥福を祈る。それにしても、斉藤兵曹はどうなったことだろう。心配だ。呼んでも答はなかった。

こうなる上は、残りの弾を打ちつくし、吾も立派に、小隊長のあとをおう日も近からう。少々元氣もなくなつた。

夕方二人で島を一周。恐らく明日は終りだろうから、せめて最後の陣地は一米でも内地に近くを選んで作らうと。位置を定めて、再びシーマに入りしに、思いもよらず、友軍十四空の下士三、兵四、航空廠の者一、計八名と会う。

全く神の助けかと、涙こぼるる思いなり。積る話で暮れ方となる。椰子リングにて夕食を御馳走になり、今晚飛行の筏にてイミシ行に加わる。総て夢の如くなり。夜陰に乗じて筏を組む。この筏の木は艱難辛苦、十幾日間を当島にこもりて、剣一つにて、切りしという。材木約一〇〇本以上人間なせば何事でも出来ないことではないと思ふ。組んだ筏を水道口まで約三時間押し出せしも、つい成功せず、再び陸地にひき返し夜を明かす。

十二月五日

思えば、昨夜は仏滅だった。ずぶ濡れにて、小銃は海水に浸ってしまった。夜は寒さに苦しんだ。しかし昼間の疲れで、濡れ服のまま、石の上で一夜を明かした。今日は朝からスコールド。寒い寒い。食は少し、下痢はする。しばし途方にくれる。午後コンパニーのハウスを見つけて入る。ここにて一日平凡な日を過ごす。食べものもなく、何にもかも

少くなる。友も少くなる。海岸で拾ったバターらしき物少々御馳走だった。又夜もスコールドあり。

十二月六日

前日同様ハウスの中にあり。今日朝から天気よく一〇名共元氣で朝食をすませます。

古川兵曹が四名を連れて食糧をとりに出かけて間もなく、敵の戦車二台シマに向って進んで来、シマの掃蕩にかかった。かたまつて居ては危険なので、又皆はなればなれになってしまった。原兵曹のことが心配だ。何も兵器をもっていない。第十四空のもの二名と、穴の中に入って、息をひそめていたため、三米位のところを、敵は歩いていったが、気づく様子もなかった。神仏のおかげであると思つた。戦車は朝六時頃から日の入る頃までシマにいる。吾等三人は日の入る頃に島を出る。三人とも元氣で次の島に上り休む。蚊が多くてとても眠れない。九時頃よりスコールドあり。三人共ずぶ濡れになってしまった。寒い寒い。食物はなし。体は日増しにやせる。七日朝食をクーマに近い島にて済ませ、五人の友と、小屋から、二〇〇米位はなれたところで椰子をとり腹いっぱいして小屋に帰れば持物全部と一人一人もなし。さて心配。附近をさがすも、姿はみえず、自分は島の端に出て見れば、何時来たことか、外海岸に戦車二台おりぬ。すは一大事と五人で剣一、ナイフ一だけもち、次の島まで行くことになり、頭だけ出して、海中を渡り向うを見れば、敵は昼食中の如し。よくも見つから

ず、渡つたものと我乍らおどろく。急いで島の突端に至り六、七千米向うのピカチに向いて海中に入る。約二時間泳ぎしも、山の如き波にさらはれて全く力はつき、死人の如し。これでは無駄と又波にのって帰る。今は全く糧までも波にとらる。自決もできない。両手に石をにぎりて最後を待つこと約二時間、後は進む外なし。石を投げて向えば、敵は打つもの定め、我一人少し前に出て小穴に入る。

外の四人は一個所に入る。敵戦車、散兵との距離五〇米位にて、四名はどうしたとか、飛んで出て、海に入る。戦車砲、機関銃、小銃で無茶苦茶にうちつづける。小生は唯一人敵戦車の五米横、散兵とは二、三米のところまで今か今かと最後の時期を待ちぬ。知らず、知らず身はふるえたり。斯くして約三十分、四人は戦死したのか又は遠くはなれたためか、銃声もやみ、日没と共に敵兵全部引き上げたり。

我はまた神助か生あり、然し全く独り、身にしみて淋しい。四人の行方は何処か。彼方此方見ても人影なし。敵の鉄かぶと一つを拾って、とにかく前の島に帰る。人影の様なものを認め、身動き一つせず、冷たいスコールドの下に寝る。夢中の悲しき、独り身の淋しさ。一方ならず。糧もなければ靴もなく、服もなければ、脚絆もなし、途方にくれる。

今日こそ大東亜戦争二周年記念日なり。本日スコールド多し。南海の地とはいえ、寒さ身にしむ。昨

十二月八日

今日こそ大東亜戦争二周年記念日なり。本日スコールド多し。南海の地とはいえ、寒さ身にしむ。昨

今日こそ大東亜戦争二周年記念日なり。本日スコールド多し。南海の地とはいえ、寒さ身にしむ。昨

夜の人影を敵と思い、八時頃まで椰子の根元に様子を見る。スコールもやむ。敵も見えず、外に出て島を一周するも全く無人なり。

五人の友の戦死のあともし、さては五人はまだ生きているものと思ひ、元氣百倍なり。椰子リングにて腹をつくり、外海岸に出て休み、残されている被服、ズボンとシャツ、靴をさがして乾かし、元氣を出して再び島中を探す。五人の戦死の地なし。良し。今夜また一つ向うの島に渡って見ようと決心する。

氣がつくと敵のカヌー三隻、向うの島に渡り、再び掃探の如し。満潮を待つて残りの小島を全部周って帰りぬ。クーマに向つてゆくもの如し。入陽と同時に、潮のひくも待たず、元の島にわたり呼べとさがせど人影なし。島を一周していよいよ自決の覚悟、再び掃ろうとしたとき、我を呼ぶものあり。声をたよりに近寄れば、小松一主曹、後部、野上の諸氏で、いよいよ筏にて決行すべく出かける途中なり。全く神の引き合せと涙こぼるる思いなり。再び元氣をとりもどし今夜は取止む。一夜元氣でぐっすり眠る。夜中大音響あり。砲声盛んなり。友軍二式大艇が爆撃に飛来したものの如し。全く嬉し。元氣を増す。

十二月九日
不思議に命がらえて、八日も過ぎたり。皆神助の外なしと感謝いたしようもなし。今後もただ、神の力もちて、一大任務遂行を願うのみ。朝から天気晴朗なり。一日見張を主として終る。昨夜二式の爆撃らしく、物凄き爆音は、

本日も昼頃、ウキアガンに煙ももうなり。大戦果の如し。元氣づく。十何日かの月は中天に高く照り輝けり。

十二月十日
天気晴朗なり。朝外海岸も敵掃海艇らしきものピカチ方向に向う。今日も大体見張をして終る。椰子リングばかりの糧食にて力日に衰へるなり。夕方砲声の発砲の音盛んに聞こゆ。

十二月十一日
例によつて椰子リングの朝食を終え、見張につく。小銃の手入は毎日行ふ。海中に半日全く赤く錆びたり。七時頃カヌー三隻クーマよりブタリタリに向う。戦車も一台七時来りて午後帰る。十四、五日頃カヌーにてクーマより出発の予定なり。十五夜の月をながめて、椰子リングの下に眠る。

十二月十二日
天氣は良し。風も西北に向う如し。カヌーにてクーマより出発の日を待つのみ。一刻も早く、元氣で行こう。午後八時頃引潮を待つて次の島に移る。あと二日だ。戦車は相変わらずクーマに来る。

十二月十三日
朝から物凄くスコールだ。小屋の中にて一日過す。出発を明日にひかえて、しばらくぶりにて、石鹼にて顔、頭を洗い、夜半クーマに渡る予定。

原兵曹、後部上水、小松一等主計、野上等兵はマキン島最後の日本兵である。

野上等兵は昼頃糧食を土民より貰うべく、三友に途中まで送り、一人にてルータ嬢家に行きしも、遂に敵兵に見つかり捕虜とな

る。外の三名は塹壕に帰り、野上の掃りを待ちおりしところ発見されて交戦せど、手榴弾にて、原兵曹、後部上水の四名は、その場にて戦死、小松二等兵曹は頭に軽傷を負いて倒れしを捕虜となる。

ウ八三ウ八五気付ウ一七七太田隊

和田義一
永い間の母の慈愛、報恩の一端も尽くせず、そのみか苦勞ばかりおかけ致しましてお詫びの言葉もございませぬ。恵まれなかった母上よ私を許して下さい。御国のために義一は笑つて、母上に先立つのです。

あどがき
環礁の資料漁りに防衛庁戦史室を訪ねたところふとこの手記が目についた。そして最後に

「マキン島に上陸した日系二世の兵士は、一日本兵の遺体のポケットから、この日記帳を見つけて、帰米の途ハワイに寄港した。そしてこれをハワイの知人に示したもので、戦後も日本の故人の縁故者が判明したら、遺族の方に返したいと念願していた。」

この日記は、自決する前に、本人が思い出しながら書きのこしたのか、その点は判明しない。私はハワイの知人が書き写したものを借りて、写したものである」と誌されてあった。厚生省で調べた結果浜松市出身の海軍上等兵曹和田義一氏で、母堂はゆゑさんと

かいてあったので、早速お問い合せた。しかし移転されたか何かで御返事が頂けなかった。同氏のご冥福を祈り、長い黙禱を捧げた。

「タラワ恐るべき

戦闘」の記録を読んで

熊本 植 村 芳 恵

「回」番に茨城県の太熊もと様から、回して下さったタラワのご本、読ませていただきました。誠に有難うございました。厚く厚く御礼申し上げます。これも遺族会に入会致して居りましたお蔭だと、お世話下さいました方々に深く感謝致します。本当に有難うございました。

思えば月日の立つのは早いもの丸々二十八年、足かけ二十九年、苦しみ悲しみも人並に味って参りましたが、戦死された方々が、宿命とは云え可愛想です。アメリカ側から見たタラワ、マキン島の日本將兵の皆様の戦い振りを示されてありますが、強く、勇敢に、立派に戦い抜き、数倍の海陸空からの襲撃にたえ強く戦われたと云うことでした。力尽き南海の孤島で致し方なく玉碎という悲しい戦いに終り、さぞかし無念の涙、やらかたなき残念だったろうと思ひます。でもかかってない程の強軍で皆力の限り命をなげ戦い抜かれた日本最強の特別陸戦隊だったという事でした。

日本を遠く、あまりにも遠く離れていた南海の孤島で如何なす事も出来なかつたのでしょ。勇敢に戦われた両島の皆様の事を讀み乍ら深く感動致しました。

さぞかし苦しい一日、二日、三日、四日、五日でございました。

しょう。一日目に戦死した方、二日目に戦死した方と、それぞれ命のある間苦しい戦いでありました。日本兵の死体二十四云々……とか又ここにも日本人の死体と記されてあると、どの死体も主人のような氣が致し、どのようにして息をひきとつたであらうかと思つと悲しみがこみ上げて参ります。一番可愛想な死体、首は飛び、内臓が出てしまっているなど泣けて泣けて仕方ありませんでした。どの死体にも泣けますけど。

数日の短かい日ではありましたが終日史上最大の激しい戦いに、さぞかし苦しかったことと思ひます。無念の涙かみしめて死んで逝かれたことでしょう。本當に戦争はすまじきものと思ひました。

文明国にならなくてもいい、国が大きくならなくてもいい、唯静かに、平和にみんな仲よく暮せたらそれでいいのではないでしようか。慾望など捨て去つて皆んな揃つて静かに暮せたら願ひます。

遠く南海の孤島に散られた勇士の方々の御霊に心をこめて冥福を祈るのみでございます。行けたら一生に一度主人の亡くなった土地を踏んで見たい思ひですが、余りにも遠く……。タラワの会でも作りたい思ひです。では取り急ぎ皆様何卒お健やかにお過ごし下さいませ。乱筆にてあらあらかしこ。

政府派遣のギルバート諸島

戦歿者遺骨収集団からの消息

太平洋戦争中玉砕地の多かったマーシャル諸島、ギルバート諸島の遺骨収集、現地慰霊については昭和三十八年本会創立の時から政府において至急実施されたい旨を陳情して、しかし、当局は昭和29年国として行った南方八島遺骨収集、慰霊、建碑行動中海上から慰霊祭を行ったことと、同地域は相手国の了承を得られないという理由で実現に至らなかった。

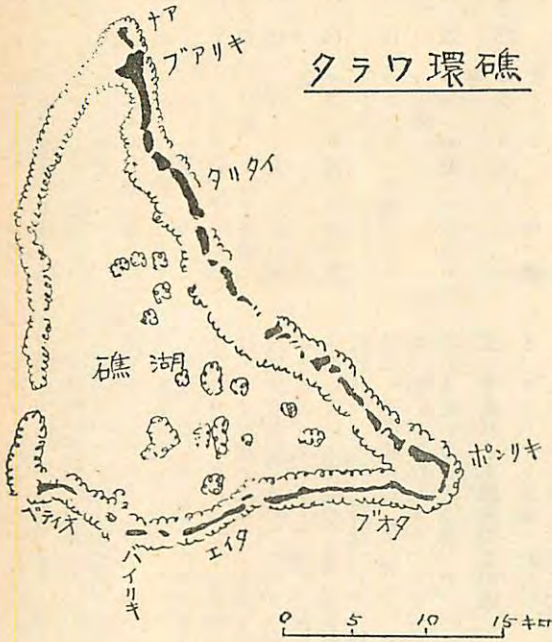
それならばということで、本会独自で代表を派遣する決意を固め、相手国との交渉、現地の予備調査のため莫大な費用と、役員異常の

努力によって昭和42年、これを成しとげた。

本年に至り政府は漸く、これを行なう計画をたて予算はとったが、確定的の成案が得られないため、環礁14号に掲載した程度の発表をされた。

その後具体的の計画が進められた結果九月に入り左の二氏がギルバート諸島に派遣のことに決定された。

叙勲調査室長補佐義村判事氏
業務第一課庶務係長浜野朝氏
両氏は9月28日から10月26日に至るソロモン諸島遺骨収集団々員



10・9	10・7	9・28	9・29
午前6時50分ナンディイ空港発、午後2時バイリキ空港(タラワ環礁)着	派遣団4名中前記の2名午前7時30分ホニアラ空港発。午後4時ナンディイ空港着(フィジー島)	午後5時羽田空港発	午前5時45分ポートモレンヌ(ニューギニア、パプア地区・豪州領)空港着。午前11時15分同空港発。午後4時30分ホニアラ空港(英領ガダルカナル島)着・遺骨収集。

この期間中9月7日から20日までの二週間ギルバート諸島に派遣されるという行動であった。両氏は本会派遣団の、半年余に亘る詳細の行動記録の研究や本会備品の海図その他の資料の閲覧、体験談の聴取など熱心に準備をすめられた。

9月28日の羽田発を前に東京近郊の本会々員には、この幸の梗概をお知らせした。出発当日は浮田副会長が会を代表し、出発の無事を祈り、現地における慰霊祭に焼香のため線香を托した。

派遣団は途中無事に行動を了え10月26日夜羽田空港に帰着されたが、本誌原稿締切までに、派遣団の報告書が入りできなかったため、派遣団からきいたままを綴って見た。

(会員中ギルバート諸島への弔問を望む方の参考に航空便なども附記する)

行動経過

10・17 午前10時バイリキ空港発
10・20 午後5時ナンディイ空港着
10・25 午後2時ホニアラ空港着
10・26 午前10時半ポートモレンヌに着、午後4時発、午後9時15分香港空港着
10・26 午後8時羽田空港着

計 七二〇〇体

ギルバート諸島に関する限り、本会派遣員の帰還報告どおり、人目たり或は洞窟内(環礁はすべて平地故洞窟等皆無)に人骨が残るなど全くなしとの報告であった。我方の守備中は若干の友軍墓地もあったが、玉砕時の猛烈な砲撃によって粉砕されたらしく、玉砕直前の掃蕩者から聴取した地圖などでも墓地はわからず、又今回は出発前米国に対し、日本軍戦死者の遺体埋葬地点の照会をされた由だが、その回答が緯度経度で示されており、それを地図に記入したら、環礁の真中に印され、遺骨収集の参考にはならなかったという話もあった。

このため島民の記憶を唯一の手掛りに発掘し収集したとのことであった。マキンでは滞在4時間以内という規定のため、遺骨収集の時少なく、やむを得ず、予め放送によって、マキンの管理者に発掘

を依頼し、それを受領した。ギルバート諸島の収骨数は、タラワ環礁では
ベテリオ島 三〇〇体
北ベテリオ島 二〇〇体
マキン環礁では
ブタリタリ島 二〇〇体
アバマ環礁では
二二〇体
九三〇体

を故国に迎えた。

九三〇体中氏名の判明した遺骨は一体もなく、従って肉身のもとに届けられるものなかつたことは致し方なしとは云え残念に思われる。環礁7号4頁でお伝えしたとおり、この遺骨はしばらく厚生省内霊安室に安置され、不日千鳥ヶ淵墓苑に納められる。

ギルバート諸島への政府派遣団の行動経過や結果は以上のとおりであるが現地に行きたい方、ギルバートの近況を知りたい方のため派遣団員からのお話を附記する。

附記

一、マーシャル諸島方面への政府派遣団

マーシャル諸島へは厚生省援護局の
審査課課長補佐 千葉秀夫氏
援護課 芦名久吉氏
外マジュロまで通訳として外務省の方が一名計三名が左の予定で行かれることとなった。

10・30 昼12時羽田空港発
10・31 午後4時15分グラム着
午前9時9時グラム空港発
午前10時30分サイパン空港着

- 11・3 午前8時サイパン発グ
ァム空港經由午後4時
35分マジュロ空港着
- 11・6 マジュロ着
- 11・8 クエゼリン発(5日)
クエゼリン着(7日)
マジュロ着
- 11・9 マジュロ発、ミリ島着
- 11・12 ミリ発、ヤルト着
- 11・15 ヤルト発、マジュロ
着
- 11・16 マジュロ発、マロエラ
ッブ着
- 11・19 マロエラッブ発、ウオ
ッゼ着
- 11・22 ウォッゼ発、マジュロ
着
- 11・23 マジュロ発
- 11・26 アイリングラブラブ着
アイリングラブラブ発
マジュロ発
- 11・29 マジュロ発、グァム着
- 12・1 グァム発、羽田着

という行動予定なので、本誌原稿締切の関係上、その報告は、本号に、載せられないが、二月六日靖国神社での慰霊祭の際、派遣団の方のお話を伺いたいと考えている。

二、政府の戦死者遺骨収派遣団と同行する民間団体について

近頃はこの課題のとおり、政府派遣団と個人又は団体が一緒に行動することが折々ある。行動予定も経費もすべて自己負担である。例えば今回もラバウル戦友会とか全国ソロモン会がそれで、収集地で合同し、共に遺骨を収集する。

ラバウル戦友会の一団は政府派遣団と同機で羽田発。ニュージョージア島その他の収集を行ったら帰国。又一つの班は派遣団より二週間おくれで出発しガダルカナル島の収骨に行った。

これと同じ意味で、戦争中タラワ島の守備にあたった平山幹雄氏はハワイを廻ってフィジー島で派遣団に合流し、タラワにゆく予定のところ、フィジー空港で合流し乍らよい出発のとき、重量制限境目のところで同乗できず、次便は一週間後でないとならないので、願いがかなわずそのまま帰還されるといふこともあった。

三、ギルバート諸島のこの頃

イ、ギルバート諸島へ旅行
ギルバート諸島へはどのような方法でゆけるかについて、環礁6号1頁記念祭典への招待で、行かれる方があった場合の御参考にとのこ。羽田からハワイにゆき、ハワイからフィジーそしてタラワにいう道順である。

又政府派遣団の行った羽田からポートモレスビー、ホニアラ、ナンドイーを経由の道もある。現状ではこの航空路は
羽田から香港經由ポートモンスビー間 週一回火
ポートモレスビーとホニアラ間 週二回
ホニアラ フィジー間 週三回
フィジー、タラワ間 週一回土
余裕があればハワイからフィジ

ータラワフィジーホニアラポートモレスビー香港羽田とすれば多くの戦跡が訪ねられる。口、ギルバート諸島内の交通(船便)

タラワ環礁、マキン環礁、アベママ、環礁等環礁間に船便はあるがおおむね月一回程度である。(航空便)

タラワ環礁の空港はバイリキ島にある。空港はマキン環礁ではブタリタリ島に、アベママ環礁ではアベママにある。二十人乗位の小型飛行機で一人の航空運賃
バイリキ、マキン間往復35ドル
バイリキ、アベママ間同20ドル
ハ、政治

ギルバート、エリス英植民地の政府がバイリキ島にあり、ギルバート地域の政府がベデオ島にあることは本会派遣員渡航の際と変りないが、現在は、独立運動の最中であり、47年4月を目標に準備をすすめている。独立の結果当初の大統領となるのは島出身のタンエン、トア、ソリルーパーン氏との由。政府庁舎はベデオと同じ様式の由。

二、ベデオ島
ベデオ島に本会派遣員の建立した慰霊碑は、その後しばらく綺麗にされていたが同島を訪れた水落氏の報があったが、今回政府の派遣団が訪れたときは撤去されていた。建立後四年酷暑とスコールによる湿気のため、外観上取除かれたか、他に移動されたか不明。あの当時日、英、米三国の合同慰霊碑建立の計画はあったが、米海兵隊のみの慰霊碑建立に計画変更が行われたとも思われる。当初か

ら本会の建てた慰霊碑はクエゼリンに本格的な慰霊碑建立後は除去する予定ではあったが、合同慰霊碑建立費の一部を拠出したことではありその願末につき、今後ベテイオ政府に照会する。

政府派遣団は、我軍が司令部として構築し使用した防空壕あとで慰霊祭を行い、本会が依頼したお香で焼香し、諸霊の冥福を祈って下さった由

ベデオ島には42年頃と同じくホテルも病院もない。ホ、バイリキ島
政府があり、空港はフィジー島との間に週一回の定期便が発着する。ホテルは一軒あり二十名程度宿泊できる。一泊10ドル内外。冷房の設備はない。

ここには病院がある。ここについておている人では記録してない人がオリーシャン島から移転して来た人が大の親日家である。戦時中オリーシャンにいたが十二、三才の少年であった。

環礁北端のブアリキ島。バイリキ島から船で3時間。朝7時バイリキ発。ブアリキ島に7時間とどまり夕方8時バイリキ着。

この船賃一時間の単価に出発から帰投までの時間を乗じたもの60ドル近かったという。

こここの島民も派遣員には親切であり、若い人達が遺骨の発掘を手伝ってくれた。食事も出してくれ。遺骨23体を発掘した。

前記アベママ島と同じくバイリキ島との間に航空便がある。マキン環礁でもブタリタリ島で管理者から昼食の接待を受けた。軍歌や民謡を歌ってくれた。農協のトラックが一台あった。バイクは日本のスズキが多くをしめ、ホンダは少なかった。我軍の大艇は本会の写した写真のとおり今なおその残骸が残っていた。

ギルバート諸島ではないがタラワに亘る飛行機はフィジーから出るので補足するが、ここには空港から徒歩10分位のところにタノアホテルというのがありそこに宿泊した。一泊13ドル支払ったが小さい部屋だと8ドル程度であった。通貨はフィジードルで、フィジーセントであった

四、島民感情
本会派遣員が出発前もとても不安であったのは壕内に近いタラワ、マキン、ナウル、オリーシャンの島民感情であったが、訪問してみても何れの島も、大変親切であることにおどろいたし、どの島でも太平洋行進曲はじめ軍歌や歌謡曲を得意気にかかせてくれるにおどろいたが、今回の派遣団もどこに行ってもその感を深くしたとのことである。これはたしかに日本軍の守備隊が島民に与えた印象が非常によかったことの証拠ではないかと考えた。従って、戦死した英霊に対する態度も鄭重であることは本会派遣員、政府派遣団全く同じく感じたところ、淋しく眠る異郷の地にこうした温いお守りのあることはせめてもの慰さめとつくづく考えた。

麗わしいナウル四高会

四月四日(46年)島崎藤村の
小諸なる 古城のほとり
雲白く 遊子悲しむ

で、名高い小諸市の古城内山城館
で第十六回ナウル四高会が、同市
の会員小林重雄氏の斡旋によって
開催されました。

上野の桜は既に散り初めたのに
ここは蕾未だ開かぬのみか、小雪
まじりの曇のため、寒さも一入な
ので開会までの一時炬燵に足を投
げ出し、野沢菜の漬物をお茶請け
に、ナウルの話がはずんでいまし
た。

遺族の方々には会員の話を、失っ
たご主人に或はお子さんに、或は
お父さんに結びつけて聞き入り、
私達は平和に戻ったナウルとのつ
ながりをつけながら耳を聳で、会
員同志はつい昨日のように思われ
る赤道直下の暑さ、水のほしさと
寒の寒さを較べながら賑かです
た。

やけつく暑さの同島に、長い間
苦戦をなさった会員の方々、炬
燵を囲んで戦歿战友の遺族に語ら
れる御心境や如何にお察しまし
た。
中食が始まって間もなく、どな
たですか、動議を出され、マーン
シャル遺族会の内容紹介に及び、会
の充実と発展の一助として運営資
金のカンパを叫ばれました。即座
に奉加帳が廻され、会員全員のご
芳志が集り、江村会長から鄭重な
要田気のうちに私に渡されました
皆さんのわれるような拍手の中に
これを頂いたとき、これらの方々
の胸から去ることない亡き战友の

慰霊と御遺族の励ましに胸に刻み
こまれました。環礁14号寄附者芳
名の筆頭が小諸で、三村目のは、
二月六日靖国神社で江村会長が御
参列のときお供え下さったお神料
であることを附記して重ねて御礼
申し上げます。

宴漸く酣となったとき、小諸市
婦人会有志による地方色豊かな舞
踊の数々が披露されました。これ
また満場の拍手でした。小林様の
説く四高会の趣旨に感銘した小諸
市の主婦やお嬢さんによって組ま
れた四高会にふさわしい清らかな

軍事機密の壁に泣く

南太平洋のクエゼリン環礁

遺骨収集団の派遣不許可

米軍の軍事機密のベールにおお
われている南太平洋のマーンシャ
ル諸島へ、厚生省は国として初めて
の遺骨収集団を派遣することにな
ったが、出発前の二十八日、米大
使館から厚生省に弾道弾迎撃ミサ
イル(ABM)の発射実験場のある
クエゼリン環礁には上陸を許可
しないという連絡があった。同環
礁はマーンシャル諸島の中でも最大の
激戦地。八千人を越す戦歿者が眠
っているだけに「軍事機密のカベ
があるだけに、何とかならない
か」と遺族は嘆いている。

マーンシャル諸島は、サイパン、
グアムなどのマリアナ諸島から東
へさらに千キロ以上も離れたクエ
ゼリン、ビキニ、エニウエトク(プ
ラウン)などの環礁をもつ。太平
洋戦争末期の昭和十九年、米軍が

ひとときは、英霊も御遺族も又私
達まで「何と美しし催しであらう
か」と感激致しました。
つきない話に名残も惜しまれま
したが、次の予定もあつて二時閉
会。このあと大部の方は休養に予
定された小諸からバスで一時間の
高峰温泉のホテルに向いました。

私達は翌日の予定もあり、小諸か
ら車中の人となりましたが、古城
のほとり麗わしい戦友会に清めら
れた数々の話を思い返す中、いつ
しか、雑踏の上野駅ホームで人を
かきわけ歩いていました。(浮田)

島伝いに進攻、占領した。この戦
闘で、日本軍守備隊は八、二八〇人
人がクエゼリンで、二、九〇〇人
がウオッゼ島で、二、二〇〇人が
エニウエトクで、と倒れ、マーン
シャル諸島全体で二九、〇〇〇人が
戦死した。

戦後米国が信託統治、ビキニ、
エニウエトクの両環礁は原水爆実
験場となつて、諸島すべてがきび
しいオプ・リミット。その後、ク
エゼリン環礁に大陸間弾道弾やA
BMの発射実験場もつくられた。

同諸島で戦歿した将兵の遺族は
ギルバート諸島と合わせてマーン
シャル方面遺族会(村上義一会長、
会員四、〇〇〇人)をつくり遺骨
の収集を厚生省に働きかけてきた
。国がなかなか腰を上げなかつた
。四十二年、遺族会の代表二人

が島を回った。しかし、そのとき
もエニウエトクとクエゼリンには
上陸を許されなかった。四十三年
遺族会が慰霊碑を送り、クエゼリ
ンに慰霊碑を建立したが、参拝は
許可されず、米軍から写真が送ら
れてきただけ。
政府も遺族会の強い働きかけを
受けて、ようやく遺骨収集団を派
遣することに踏切った。今月三十
日に出発、厚生、外務省の係官三
人が、約一カ月の予定でクエゼリ
ンを含む八島をまわって遺骨収集
をする目的をたてたが、

の出発の直前になつてクエゼリン
への上陸不許可の連絡。米側は理
由を明らかにしていないが、厚生
省では「やはりミサイル基地があ
るため軍事機密を守るための措置
だろう」とみている。そして米側
の軟化を待つほかない、という態
度だ。

だが、戦後二十六年もたつてま
た遺骨収集の望みを断られた遺族
たちの嘆きは深い。四十二年に遺
族会代表としてマーンシャル諸島を
訪れたマーンシャル遺族会副会長の
浮田信家さん(七〇)「東京都世
田谷区三ノ一ノ三〇は「やっぱ
りダメでしたか。私たちが行った
ときにも船でクエゼリンまで行っ
たが上陸を認められなかった。軍
事上の秘密をやむをえないのかも
しれないが、まったく残念だ。海
軍大尉だった弟がクエゼリンに眠
っているの、ぜひ行ってみたい
。同じ気持の遺族が多いと思
う」と話している。(四十六年十月二十八日朝日新聞
夕刊)

十月の声を聞き、朝夕は肌寒さ
を感じられる今日この頃でござい
ます。突然にお便り差出し失礼い
たします。
海軍兵曹長浦手初男(明治43・
2・20生)妻ハルでございます。
昭和十九年一月四日横須賀を出港
したとき、便りがなく、六月に
十九年二月六日南方洋上に戦死
すと公報が入りました。当時私達
家族は異に居住していました。主
人の友人が何処で戦死されたのか
調べて下され、クエゼリン島で、
玉碎と云うことを知りましたが、
部隊名等は知りません。何時か、
クエゼリン島に建てられた慰霊碑
の新聞記事を見て、マーンシャル方
面遺族会の事を知りました。
出港一週間前は呉から二児を
連れて横須賀へ面会に行き、お正
月を一語にしました。一月四日見
送つて呉に帰りましたが、それが
最後のお訣でした。

仲間に加えて下さい(1)

広島 浦手 ハル

当時長男七才、次男は二才でし
ましたが、皆様のお陰で、立派に成長
しています。クエゼリン島の様子も少
しも知りませんので残念に思いま
す。今後宜しくお願ひします。
私は現在バス会社の寮母として
働いています。クエゼリン島の記
事がありますれば知りたいので
す。とりとめのない事ばかり書い
て失礼いたしました。

マーシャル諸島の 戦歿者遺骨収集のため 政府派遣遺団派遣を聞いて

佐竹 エス

厚生省のお役人が、マーシャル諸島へ遺骨収集、慰霊のため、政府としては戦後はじめて、戦跡訪問を行われると聞きまして。

なぜ今頃になって、行かれることになったのでしょうか？ それも一人の遺族の参加もなく！ 遺骨収集、慰霊など、誰のために、何のために、英霊は誰を一番のぞみ待っている事でしょう。

マーシャル方面の現地訪問は、何回の陳情、歎願にもかかわらず政府がおとりあげ下さらなかつたため我遺族会が代表をして、我軍の守備した全部の島を廻りましたし、慰霊碑も建て、慰霊祭を行いました。マーシャル諸島全域の戦歿者は二万人以上であつて、これを全部収集して下さるおつもりなのでしようか？ マーシャル方面の島々およそ人が住めるほどの島は総て英霊が眠っています。

私遣遺族は一目でよいから肉親の戦死した場所を見たい気持ちの者ばかりです。待ちきれなくて又果してやって下さるのかどうか、多くの不安で我々遺族がその全域の慰霊碑を遺族全員の力で、クエゼリン本島に建立しました。

以上のことは厚生大臣以下主な役人の方には毎号差上げた環礁によって御存じのとおりです。なぜ遺族を連れていって下さら

ないのですか。経済的にゆとりのない遺族が多いのですが、誰もが一度お参りしたいのです。貧しい中から徴集される私遣の税金から、大勢つれて行って頂きたいのですが、無理ならたとえ代表一人でも連れていって下さったら、どんなに気持ちも安らぐ事か、さらには英霊も喜んでくれると信じます。

クエゼリン島の慰霊碑には、常に日本のお供物や線香を送り、現地の方々の誠意あるご供養によって、御供養をつづけていることも御承知の筈です。これに對し今迄、大臣がお偉らすぎると云うなら、ご担当していらつしやる局長からでも、英霊のため、お線香を一本、お供え下さつたことがあつたでしようか、すっかり遺族の手で調査し、収骨し、慰霊し、立派に忠魂慰霊碑も完成し、外にすることのなくなった今になって、力の弱い遺族会が資料をあつめ、対外的危険の考慮も予想しながら乗込んだ地域に、遺族を参加させることなく遺骨収集、現地慰霊団とは、美名を藉りた、海外旅行のよ

うな気がしてなりません。これは単に私だけのひがみなのでしようか。

題をご覧になって、不思議に思

う方が多いと思います。この島はウォッゼの北約一三〇哩にあるウートロック環礁の主島で人口二百人、現地慰霊に行つた私遣も、ここに八十人も英霊が眠っている事は知りませんでした。

一、航海

昭和42年8月12日待ちに待った船がウォッゼ島に行く知らせを受けました。船はラリック、ラタック号。船長はギルバート航海以来

顔なじみの人。午前9時出港、北水道をぬけ、一路最初の寄港地クエゼリン環礁に向いました。

ウートロック島の慰霊

一 遺骨収集に想う

クエゼリンには西水道から環湖に入るため、クエゼリン本島の南端から同島を右舷に見ながら一周しエビゼ島の埠頭に着きました。マジネロからの船客の一部が下船しました。私遣は上陸し、全島をゆつくり一周、玉砕当時を偲び、心の中で英霊をお慰めしました。(環礁7号エビゼ島の想い出参照) 泊中16日にはクエゼリン基地ヒ

ーレー司令官にお会いし、従来の御礼と今後同島に慰霊碑建立の協力をお願いし快諾を得たりしました。17日午後3時エビゼ島を出港しロンゴラック環礁に向いました。これから先の航海はコブ

ラ買付のためです。夕方左舷遙かにルオット島を認めましたが、日没のため、島の様子はわかりませんでした。ウォッゼまでにはまだいくつかの環礁を廻りますので長い日数がかかります。

二、カナメヤママラさん

カナメさんはマジネロに住む日系人ですが、会社を休み、旅費は自分ですが、夫婦で、私達の北部マーシャル案内のため同行して下さいました。

どの島にも親類や知人があり、どの島のこともよく知っていますので入港前に図(私達は水路部の海図や水路誌をもっていました)について地方誌や島民の特徴・戦争中のでき事を話して下さいました。大変参考になりました。

寄港した島には全部上陸しました。カナメさんの案内で、日本軍の話や島民から聞けましたし、こわれた飛行機や船、大砲等が陸に又海中に見られ、自然にロケットをともしたりお線香をつけ、野花を飾つて英霊を慰めました。いつもカナメさんの案内でした。

三、ウートロック環礁

最初のコブラ買付のロンゴラック環礁から、リキエップ環礁、アイルック環礁に寄港のあと8月23日昼前ウートロック環礁に投錨、直ちに上陸しました。マーシャル諸島中特に浅礁の多い、航行至難なところと日本の水路誌にありますが、さすが慣れた船長もマストに二人、船首に一人の見張をつけ敵軍警戒裡に船を進めました。上陸後カナメさんの案内で日本軍兵舎跡に行きました。年寄りが「この島の日本守備隊は八〇人位



茶屋にぶす(佐竹)

でした。艦砲の掩護射撃下上陸して来た米軍は戦車九台を陸揚し攻撃して来ました。そのときの弾痕が椰子の木に残り、又薙ぎ倒された木はこのように今尚残っています。日本軍の命令で私達は米軍の揚陸前隣の島に避難させられました。銃声も止み、米軍の引揚げたのを確かめ、島に戻って見たら日本軍は全員玉砕してしまいました。敵上陸直前島民部落に被害のないよう、離れた所に急に掘ったと思われる塹壕を掘(とりで)として、全員が戦死してしまいました。私達は全員をそこに埋葬しメイフラワリーの苗木を植えました。一つには床かしい香を英霊に供えたい心から、一つには米軍によって、この墓が発かれないためでした。としみり話して下さいました。一時は島民が私達に何かねだるための作り事ではないかとあやぶみ、彼等の協力を得て発掘することになりました。ところが島民の云つたとおりです。はじめ軍靴の

底、留め金次第に上にあがり最後
に頭、日本軍人のものと確認でき
ました。島民を疑った私達、今ま
での慰霊訪問での島民の温い心持
をまだ疑った私達が恥しく申しわ
けないようでした。日本の守備隊
には機関銃一挺と小銃だけであっ
たとも云っていました。日本軍の
勇敢な事、食糧の少ない中から島
民に分けて下さった事、我々日本
軍は戦死は致し方ないが、米軍が
上陸してくると、島民にも迷惑を
かけることになるから早く逃げる
ように云われたこと、暇があれば
魚の採り方や野菜の作り方等も教
えて下さった。勇敢で優しい日本
軍が負けたのは武器がなかったか
らだと、とても残念だったと話し
戦死者は軍服のまま全員をこの壘
壕に、手厚く埋葬なされた様子で
した。



監視所跡にて

納骨する用品を船にとりに帰る
と船長が出港は明日になったと云
われたので、火葬にすることにし
ました。椰子の木や葉を集め御冥
福を祈り乍ら、マッチをすり、点
火しました。椰子は油性が多いの
か、すぐ燃えひろがって、赤い焰
が高くのぼり、魂が昇天して御遺
族の側に飛んでいって下さいとお
祈りしながら、流れる涙と汗を拭
う事も忘れて椰子の木を集め、よ
く燃えるようつとめました。
四周見渡す限り海という南溟の
孤島で、二人だけの淋しい葬儀で
す。島民は不思議そうに遠巻きに
して見ていました。
海行かば水漬くかばね
山行かば草むすかばね
大君の辺にこそしなめ
かえりみはせじ

んの家といっても、狭くただスロ
ールを避けるだけのような感じだ
でした。このパンの木に蚊帳をつり
アンペラを敷き、野宿しました。
すっかりマーシャルの生活になれ
た私も昼の出来事が目に浮び、寝
つかれませんでした。十時出港と
聞いたので起床後島の中央部探照
灯や、守備隊や水槽の跡がある
いうことで、カナメさんと島民の
案内でまわりました。
建物はありませんが、コンクリ
ートの土台や階段のあった場所、
大きな水槽も三ヶあり、こんな島
に80人もの守備隊が思った不審
もこれで肯けました。船の都合で
思いがけない島を訪れましたが、
魂が呼びびになったのだと思う外
はありませんでした。

四、むすび

マーシャル諸島内の船便はコブ
ラの買付が主のため場あたりの
今く予定がたちません。船長に聞
き思いがけない島に立寄りまし
た。どの島にも上陸しましたが、
慰霊を第一に考え英霊の眠るとこ
ろをさがし、お参りして御冥福を
祈りました。心のこもったお墓を
掘りかえしてまで、お迎えするこ
とにわりきれないものを覚えました。
8月24日午前11時ウートロック
島と別れ、同じ環礁内のアオン島
の買付けが終れば、いよいよ待望
のウォッゼ島と胸をはずませまし
た。

篤志会員徳原夫妻のことども

- ① 御主人の徳原勇さんは腕の神
経疾患のため、今年の春ハワイ
に行き、一ヶ月余入院して手術
をうけ、帰島後も軽作業だけに
従事していた由です。このため
今回の休暇も十月の末でなくて
はとれなかったのだそうです。
ただ夫人の方は旅券書き換えに
いつも日数を要して困ったため
御主人より早目に日本に見えま
した。
- ② 十月五日徳原夫人羽田着。到
着早々はお里との往復や墓参そ
して旅券の交渉でお忙しく十日
に浮田副会長宅にお招きし、佐
竹常任幹事などと昼前から夜ま
で話しました。在日中のスケジ
ュールをきめました。
- ③ 十八日は靖国神社の秋季例大
祭当日祭。浮田副会長が案内し
十時前から拜殿に上がり、開祭
から、昇殿参拝終るまで参列し
ました。その日千島ヶ淵戦歿者
墓死では午後常陸宮同殿妃下御
参列のもと、遺族、官庁、外国
使臣、武官の参列を得て秋季の
慰霊祭が行われましたがそれに
も最後まで参列しました。
- ④ 二十九日に御主人が羽田着。
七日には御希望によって上野の
笹の雪で豆腐料理の試食に御案
内し大変なご満足でした。
- ⑤ 十一月七日から御四人四国旅
行に出かけました。高松、高
知、松山を経て広島に渡り、会
員の植田操様にお会いし、一年ぶ
りの懇談をなさいました。十二
日に旅から帰京、帝国ホテルに
宿をとりました。
- ⑥ 翌十三日夫妻を囲んで、会費
制の懇談会を東条会館で催しま
した。昨年までは何となしに
お客さんを招待するという形で
したが、46年からは徳原さんも
会員の一人、クエゼリン在任の
会員が帰って来たことであって、遠
慮のない話のはづみでした。多
くの方に呼びかけましたが色々
御都合もあって、徳原夫妻を加
え二十人の集り、何とか一日で
も早く、墓参に行けるよう幹旋
願いたいとお頼みしました。
- ⑦ 本誌「環礁ミレ抄」で皆様既
にお馴染みの元ミレ島六十六警
備隊軍医長成宮芳三郎先生に先
年來すつかり頼られ、今回も希
望されたので十五日健康診断を
受け、沢山薬をおもちになりま
した。
- ⑧ 十七日羽田をたち、ハワイ経
由月末クエゼリンに帰られます
クエゼリンから日本に来るとき
はどうしても慰霊碑にお参りし
なければという気もちになりま
すが今回も造花ではあるが綺麗
に飾られ塵一ツなかったと話し
て下さいました。

☑このような集りに出席ご希望の
方は予め本部へお申し出置き下さ
い。

昭和四十六年度までの会費未
納の方は、なるべく早くお納
め下さいますようお願いしま
す。
(事務室より)

昭和四十七年二月六日(日)

慰 靈 祭 II (靖国神社)
 総 会 II (九段会館) } の御案内
 直会旅行会 II (房州太海)

光陰矢の如し、とは昔のことで今は光陰ミサイルの如しです。

マシナル諸島の悲劇は、ついでこの間のことと思われまますのに、もうすぐ二十八年になります。何かしら年毎に時間が短くなる気がいたします。

二月六日が近づきましたので、その行事予定をお知らせ致します

一、慰霊祭と総会

午前九時 受付開始

例年通り靖国神社参集所

午前十時 現地報告会

昨年十月三十日に厚生省の遺骨収集団がマシナル方面に行き十二月一日に帰って来ました。その団員の一人千葉秀夫事務官から最近の現地事情のお話を伺い致します。

千葉事務官は、村上会長の御子息村上主計長の部下としてウヅベ島守備にあたり、その後浮田副会長のもとで復員事務をした方です。環礁第四号にウヅベ島の戦況報告を書いて頂きました。

午前十時半 昇殿参拝
 午前十一時半 総会

九段会館大食堂で行います。

総会後中餐、懇談、解散

午後一時 直会旅行出発

二、靈砂、写真御入用の方には、当日受付でお渡し致します。

四、直会(なおい)旅行会

三、九段会館に宿泊希望の方は、宿泊月日、男女別、氏名を書いて、一月十日迄に料金添え、お申込み下さい。宿泊料は一泊二食付一人一七〇〇円です。

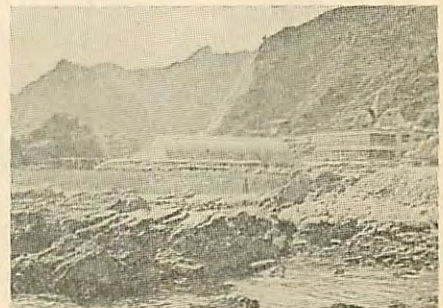
前号に予告しました通り、今年は日蓮上人ゆかりの南房州を訪ねます。(晴雨にかかわらず) 二月六日(日) 七日(月) 所 千葉県安房郡太海(ふとみ) よしのや旅館

電話 0476-2112 荅番

参加費 一人五、五〇〇円(小学生以上) 小学生以下のお子様お連れの場合お子様のバスの座



よしのや旅館全景



フラワーセンター全景

席はありません。往復バス代、宿泊料、入場料、拝観料、七日の中食代を含みます。

申込 一月十日迄に料金添えてお申込み下さい。例年当日になつての申込者多く困惑致します。申込書には氏名、男女別、年令をお書き下さい。お子様のお忘れなく。先着順定員迄お引受け致します。

日程 二月六日(日) 午後一時 九段会館発—高速道路—京葉道路—千葉市—大多喜—鴨川—よしのや旅館到着五時半

二月七日(月) フラワーセンター(仁右衛門島)—小湊誕生寺—鯛の浦—行川アイランド—勝浦(中餐)—大多喜—牛久—八幡—千葉市内(希望者下車)—京葉道路—高速道路—宝町—東京駅—九段会館着午後六時

九段会館前庭には例年通りの国際観光デラックスバスが皆様を御待ちしております。

見学箇所のご案内

太平洋の日の出

お部屋からお忘れなく御覧下さいよしのやから歩いて七、八分。岸から僅か二〇〇米先の周田四軒の小さな島、源頼朝や日蓮上人の伝説と、景色の良さで知られています。島の持主平野仁右衛門一戸だけ住んでいたのが島の名前がつけました。この島にだけ自生する金銀ナスビは有名です。

太海フラワーセンター

太平洋の黒潮躍る常春の南総鴨川市太海海岸にあります。よしの



行川アイランドフラミンゴダンス

よしのや旅館に着いて入浴の後、直会になります。イキのいい魚、心づくしの山海の珍味が用意されております。お国自慢、のど自慢、楽しい懇談に日頃の苦勞も吹き飛ばして下さいます。

やからは歩いて五分。鴨川市營で、昭和四十年に完成され、一万坪の園内に大小四百坪の温室、千三百坪の露地花壇に四季の花が咲き揃って、この世の楽園です。真冬に菜の花、金仙花、ストック、マリーゴールド、松葉菊、松葉牡丹の花盛りを見られるのは楽しみです。

誕生寺

日蓮上人の生誕の地ということで弟子の日家、日房が建立したものです。現在の本堂は天保年間の建造で四面総ケヤキ造の豪華版。貴重な宝物も拝観致します。

鯛の浦(妙の浦)

明応・元禄の二大津波によつて、今のような奇岩、奇島ができた由。今を去る七百年の昔貞応元年二月十六日日蓮上人の御生誕を祝福して二・三尺の大鯛が群集し、銀鱗を躍らせ水しぶきを上げ、海面一帯を七色の虹で飾ったと云う。今も鮫をたいて餌を投げると幾百の鯛が群つてくる様は壯観です。

行川(なめがわ)アイランド

外房の荒海を見下す岬に突き出したスケールの大きい遊園地です。ワルツの調べののって踊る幾十のフラミンゴ(白鳥)の優雅なダンスと、美しい羽を拡げて一斉に舞い下りる大孔雀のダイビングは楽しい見ものです。(佐藤)

寄付者芳名

(四七一名)

今期もまた左に掲げますとおり、多数の有志の方からの御寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。

ここに載せました会員の方からは、この外に四十六年までの会費は全部いただいております。中には四十七、四十八年と先々までの分を前納下さっている方も多数ありますことを申添えます。

環礁を御覧下さってお喜びのお便りいただいたり、寄付の御送付によって経済的の御協力をお考え下さる実情に接し、会長はじめ役員一同張り合いを感じ努力をつづけております。

(昭和46年6月から昭和46年10月31日までに入金の分)

寄付額 芳名 (敬称略)

篤志会員その他

二〇〇〇 吉川 富子殿

一〇〇〇 横溝幸四郎殿

五〇〇〇 日黒袈裟喜殿

北海道

二〇〇〇 父 沼山長一郎

一〇〇〇 妹 大橋 すみ

五〇〇〇 阿部みさを

四二五 妻 安達智恵子

青森県

一〇〇〇 兄 池田 精治

五〇〇〇 父 田中幸太郎

岩手県

一〇〇〇 母 小杉 リサ

秋田県

八〇〇 妻 奥山 きの

新潟県

二〇〇〇 妻 高林 セキ

一〇〇〇 妻 小川すみ江

五〇〇〇 姉 鮫島みさを

〃 妻 高橋 梅子

〃 妻 山本 チイ

三〇〇 母 後藤 キヨ

栃木県

三〇〇 姉 沢村キヨ子

千葉県

一〇〇〇 長女富沢 節子

〃 妹 福田 とよ

東京都

二八〇〇〇 兄 森田 富市

五〇〇〇 妻 佐竹 エス

二五〇〇〇 弟 高橋 鎮夫

二〇〇〇〇 母 助川与富子

一〇〇〇〇 母 江間 幾代

〃 母 林 春千代

神奈川県

四二五 母 吉田 いそ

山梨県

五〇〇 父 橋爪助二郎

静岡県

一〇〇〇 甥 江藤 高雄

〃 兄 鶴橋市太郎

五〇〇 父 大川 亀次

〃 兄 平野 董

富山県

一〇〇〇 母 矢野 しげ

五〇〇 母 吉田 よく

石川県

一五〇〇 姉 高島 芙蓉

一〇〇〇 妻 前田 ナカ

福井県

一〇〇〇 妻 三反崎民子

愛知県

一〇〇〇 妻 加藤 とよ

大阪府

一〇〇〇 父 栗巢弥一郎

〃 姉 中野フヂエ

兵庫県

二五〇〇 母 岡本 くま

鳥取県

二〇〇〇 妹 井上 照美

五〇〇 妻 藤原 照子

島根県

三〇〇〇 妻 園山 和子

岡山県

二〇〇〇 母 森尾起志江

広島県

五〇〇 妻 田口マサヨ

山口県

一七八〇 妻 内富みつよ

五〇〇 父 金子 実蔵

〃 母 野村 ヨネ

〃 妻 福谷 幸子

徳島県

一〇〇〇 母 白井 コト

愛媛県

一〇〇〇 父 片山 春式

〃 母 松木ミチル

五〇〇 父 裏田 咲蔵

四二五 妻 清水 朝美

〃 父 日吉幸太郎

福岡県

五〇〇 平山ヤエノ

佐賀県

〃 母 副島 リン

長崎県

二〇〇〇 父 杉浦弥一郎

一〇〇〇 妻 林 文枝

熊本県

五〇〇 妻 今村 こめ

大分県

一五〇〇 父 町田佐伝次

宮崎県

五〇〇 母 土工あぐり

四二五 長女宮田 東子

鹿児島県

〃 妻 今村カツエ

〃 妹 武田 タカ

ナウル共和国領事館開設

開設

ナウル島が昭和43年1月31日に独立し、ナウル共和国となったことは、環礁12号のナウル島地誌で紹介した。昨46年9月26日の朝日新聞で、同国の大統領ハママー、デロバート氏が来日して、日本に領事館を開設したことを報道した。

戦争中ナウルの島民の大部は、戦禍から護るためトラック島に移された。当時海軍の食糧生産部隊長海軍主計大尉佐々木哲夫氏と、現地人作業隊の、責任者であったデロバート青年との友情の結晶が領事館開設の発端となったのである。戦争中現地島民をいたわった美談は本誌が屢々あげたところであるが、この話もまた誠に嬉しい話である。

ナウル島戦没者の御遺族、同島守備に当られた方々もし戦跡訪問の旅に行かれるのでしたら、同領事館につき計画を進められたらと思います。

位置 東京都港区赤坂新坂 八二〇二二

電話 ニュー新坂ビル 東京四〇三一九四八一

一〇〇〇 父 今村市太郎

〃 母 塗木 エイ

沖繩県

七八〇 長男謝花 朝章

訂正 前号寄付者芳名中佐賀県の宮崎イトは宮崎トモ、愛知県の二〇〇吉田ひさ子は五〇〇〇の誤りです謹んで訂正致します。

仲間に加えて下さい(2)

○ 沢田キミ子様

厚生省援護局の福田事務官から「十九年二月六日戦死の沢田一二殿のご遺族、妻キミ子様、長男宏様から戦死について、少しでも聞きたいということなので遺族会から連絡をとられてはどうか」とのお話があり、会本部の資料をお送りしました。

○ 鈴木やす子様

十月末やす子様から本部に電話がありました。

「鈴木景樹というのが私の父だが、その最終階級と所屬が知りたい。実は母がいま入院中ですが父のそれを知りたいがっているので至急知らせたい」という内容でした。調べたらすぐ判りましたので折返し御答えしました。

本会発会直後本会からお送りした本会の趣意書をご記憶になり、お問合せに及びました。今まで遺族会の内容を知らなかったが早速入会させて頂くということでした。

事務局だより

○戦死者でまだ叙勲されていない遺族の方々へ

厚生省援護局

一、今次の戦争で、戦死された約二百二十万人の方々に対して、国は叙勲を行なうことを、昭和三十九年一月の閣議で決め、同年四月に第一回の発令を行なつてから、現在までに、約百九十二万人余に対して、叙勲を行なっていました。しかしまだ、約二十万人の方々に対しては遺族調査が進まないため未発令となつて

二、戦死者の叙勲にあたっては、先ず勲章等の伝達を受ける遺族の意思を確認し、その後発令されることになっております。都道府県は遺族調査に全力をあげていますが、何分にも戦後二十数年を経っておりますため、この間に遺族の居住地の変動が著しく、未発令者の遺族の所在の追跡調査を反復実施してはいますが、確認することができず困却しております。

三、ところで、叙勲の対象者は、今次の戦争で死された軍人、軍属および国家総動員法に基づく徴用者、動員学徒、女子挺身隊、国民義勇隊や、軍の作戦行動に協力中死亡された方々等であり、また、勲章等を受領できる遺族は、配偶者、子、父母など三親等以内の親族であるが、これらの親族がない場合は、現に戦死者の祭祀を行なっている

方でも受けられます。四、戦死者の遺族の方で、まだ都道府県、市区町村等から叙勲について何等の調査や連絡がない方は、速やかに住所地の市区町村役場(市区役所)の窓口に出して、一日も早く叙勲の手続きをとられることを希望します。

○副碑に装着する銘石のお願

副碑製作のことは46年度の総会で決定されたので環礁14号の事務局だよりで府県の会員からお送り頂きたい旨お願いしましたが、今日までに左の四県からお送り下さいました。

- 愛媛県 松友 郁様 7月27日
- 島根県 園山 和子様 8月12日
- 岐阜県 渡辺 き子様 10月16日
- 秋田県 小室舜司郎様 10月29日

いままのところ県単位の支部がないため、どなたかが首領をとっていただかないと、同じ県が重複したり、或は全くなかったりする心配がありますが、今更致し方ありませんので、46年2月現在名簿中、都道府県の県庁所在地の会員(多数のときは五十音順)に本部から直接お願いする。大変事務的で申わけありませんが仕事をすすめるため一応この方法で試みさせていただきます。と思ひます。

○靖国神社春秋例大祭御案内状

靖国神社では毎年四月二十二日と十月十八日に、曜日如何を問はず、春季、秋季の例大祭の儀が執り行われます。春、秋とも午前十時に始まり、諸式次第のあと昇殿参拝を致します。本会の場合毎年二月六日に本殿

に昇殿参拝を致しますが厳寒の候のため御上京できない方もあります。

幸い本会には春、秋の例大祭に会員のため例大祭の当日祭(勅使参拝の日)の案内状をお送りいただいております。御参列希望の方にお送りしようと思ひます。数に限りがありますので早目に御申込下さい。

例大祭の外七月のみたま祭の御案内も頂いております。参列ご希望の方は本部にお申込下さい。祭典とは別に神社は「靖国」という機関誌を毎月発行し本会にもお送り下さっています。

春、秋例大祭及びみたま祭の案内状と機関誌「靖国」ご希望の方は本部へお申込下さい。

○郵便振替払込用紙同封について
本号には会費完納、未納にかかわらず一枚ずつ同封致しました。前号には同封しなかつたため、御送金少なく、副碑建立を控え、会の運営に不安を生じますので、四十六年度迄の未納分は、四十七年会費と共に至急お送り下さるようお願い致します。(会計幹事)

○クエゼリン環礁カレンダー
昨年の慰霊祭に参列の方には、神社参集所で御覧いただいた、カレンダー今年も徳原様から届きました。アメリカの曆なので祭日のところは違いますが毎月横25種、縦22種の綺麗な本島、メック島、ルオット島などのカラー写真がのつています一部1ドル10セントと航空便料金四〇〇円、本部からお宅まで送料一〇〇円、計九〇〇円、ご希望の方は本部にお申込み下さい。

謹賀新年

昭和四十七年元旦

◎本会役員及び篤志会員

名誉会長	朝香 鳩彦	篤志会員	大野 克一
顧問	石橋 湛山	篤志会員	嘉村 栄
顧問	古賀織之助	篤志会員	木ノ下 甫
相談役	朝香 孚彦	篤志会員	ケイス・エス
会長	村上 義一	篤志会員	ウイリアムス
副会長	浮田 信家	篤志会員	瀬沼 光久
常任幹事	佐藤 宗不	篤志会員	土屋 太郎
常任幹事	橋口 昭利	篤志会員	徳原 勇
常任幹事	佐竹 エス	篤志会員	同 徳子
幹事	秋山 正清	篤志会員	中島 昌彦
幹事	井上 賀雄	篤志会員	成田喜代治
幹事	宇田川ヒサ	篤志会員	西村 祐造
幹事	岡野 正文	篤志会員	長谷川栄次
幹事	木村 久子	篤志会員	長谷川 敏
幹事	国松ふみ江	篤志会員	林 幸一
幹事	小泉 文江	篤志会員	藤平 直忠
幹事	高橋 鎮夫	篤志会員	松平 永芳
幹事	萩原金次郎	篤志会員	村岡 達志
幹事	山浦 信子	篤志会員	横溝幸四郎
監事	末広 正男	篤志会員	安藤 サヨ
監事	大高 吉郎	篤志会員	白鳥 悦子
篤志会員	有馬 成甫	篤志会員	本木 光江
篤志会員	板垣 徹	篤志会員	

○組写真の代価について

従来各環礁12枚1組の組写真は二〇〇円でお分けしていましたが多少小さくて判りにくい点があったので今回手札判に改めました。そのため一組二五〇円といたしましたので御了承下さい。

本部

郵便番号一五四
東京都世田谷区野沢
三丁目十一番三号
マーシャル方面遺族会
電話(東京)三三三二四番